

通所授産施設において作業従事に困難を示す知的障害者に対する セルフコントロール技法適用の検討

水谷朱里

．問題

近年、障害者の社会参加に対して、人々の関心が高まり、障害者の就労に関する法令の改正、施行が多く行なわれ、知的障害児者を取り巻く環境は急速に変化している。通所授産施設は、職員の人員不足に加え、利用者の重度・重複化など、利用者支援に困難を示している現状である。

職員の人員不足の問題を解決し、作業行動を改善するのに実用的である方法として、行動論的セルフコントロール技法の適用が検討されてきた(千田, 1990)。しかし、これまでセルフコントロール技法の適用の対象は、健常者や中・軽度の知的障害児者が多く(千田, 1990)、重度知的障害児者を対象とした研究は少ない。

セルフコントロール技法を適用する際に必要となる情報は、行動のコントロールを可能にする環境(先行条件)を調整すること(刺激制御)、自分で行動を監視することができる物(先行条件と結果条件)を自分で使うこと(セルフモニタリング)、行動を起こした後に得られる自分への報酬(結果条件)を自分で得る(自己強化)こと等である。これらの情報を知ることができる方法として、機能的アセスメントの枠組み(O'Neill et al., 1997)があり、この枠組みを用いて立案した支援計画を日常場面に適用して効果を得るためには、適用する環境や人々の特性(文脈)に適合していることが必要となる(Albin et al., 1996)。この観点を軸にした機能的アセスメントに基づいた支援計画が、日常場面に適用できるセルフコントロールのあり方を見出す手がかりを与えてくれると考える。

．目的

本研究では、作業場面で作業従事に困難を示す重度知的障害者に対するセルフコントロール技法

適用について、以下の点を検討する。

- 1．文脈に適合したセルフコントロール技法の選定方法と適用について検討する。
- 2．重度知的障害者に対するセルフコントロール技法適用の効果について検討する。

．方法

1．研究の参加者

1つの作業班の利用者、自閉症または自閉的傾向の診断を受けた重度知的障害者の男性4名と脳性まひの診断を受けた最重度知的障害者の男性1名の計5名。作業班の担当職員2名。

2．支援の手続き

1) 事前アセスメント

施設の物理的環境、施設の日課と対象者の活動状況、作業工程と作業内容を把握するために調査を行なった。

2) 支援計画の立案及び作成と実施

(1) 作業従事に困難を示す場面の選定

施設内作業に焦点を絞り、作業の課題分析をし、直接観察、VTR録画から情報を収集した。

(2) 支援計画の立案・作成

選定された場面について、O'Neill et al. (1997)の枠組みを参考に情報の収集・整理を行なった。アセスメント、支援計画の結果を担当職員に伝え、支援内容について協議し、実行案を作成した。

(3) 支援の実施

実行案に基づき個々の対象者の各作業場面で支援を実施し、分析、評価、修正を行なった。

3) 事後評価

支援の妥当性についての検討を行うため、担当職員、施設の関係者、保護者に対して事後アンケートを行なった。

．結果

1) 事前アセスメント

本研究では、午前中の施設内作業のみを支援の対象とした。対象者 A は缶洗い、缶潰しをしており、ほぼ従事していた。対象者 B は缶潰しをしており、作業中に離席することが多かった。対象者 C は紙工作業の中の牛乳パック切りをしており、作業中に離席することが多かった。対象者 A の缶洗いで使った水を捨てる作業以外、徘徊をしていた。対象者 E は倉庫で TV を見ていた。

2) 支援計画の立案及び作成と実施

(1) 作業従事に困難を示す場面の選定

対象者 A は缶洗い準備のエプロンをつけてからバケツを運ぶ間と缶沈めの間の缶をより分ける場面、対象者 B は缶潰しの間の離席場面、対象者 C は紙工作業の離席場面、対象者 D は徘徊場面、対象者 E は作業の促しの場面を選定した。

(2) 支援計画の立案・作成

対象者 A は缶をより分ける行動を缶洗い準備、缶沈めに望ましい行動として取り入れ、望ましい行動が生起するように、缶洗い準備では物の配置を作業工程通りに整え(刺激制御)、対象者の動線を単純にし、物の配置自体が手がかりになるようにした。また、物の配置が作業の順番を示していることを対象者に伝えるために絵カードを用いた(セルフモニタリング)。対象者 B は作業をしやすい環境にした(刺激制御)上で、見通しを持って作業を行うことができるようにセルフモニタリング装置を用いた。対象者 C は指示なしで紙工作業を行うことを目標にし、作業の流れを示し、作業の開始、終了の目安をつけ、見通しが持てるように棚を用い(刺激制御)、前の作業と次の作業の間の行動を連鎖させるために指示書を用いた(セルフモニタリング)。対象者 D は、実態把握時に桶を用いて缶潰しを行なうことができることが分かったため、桶が缶潰し作業の指示を示し(刺激制御)、桶を裏に向けて置くまで作業を行う(セルフモニタリング)ことにした。対象者 E は作業の促しにスケジュールボードを用いて(セルフモニタリング)、対象者の技能で行なうことができ

る作業である、缶の選別作業(刺激制御)をした。

(3) 支援の実施

対象者 A は、準備行動のエプロンをつけてからバケツを運ぶ場面において、対象者が自ら絵カードを見て、行動に移すことが確認され、エプロンをつけてからバケツを運ぶ時間が短縮した(図 1)。缶沈めにおいて、缶をより分ける行動に変化が見られた(図 2-1、2-2)。対象者 B は、環境配置によって離席行動が減少し、セルフモニタリング装置の導入によって作業量、作業従事時間が増加した(図 3)。対象者 C は、環境配置と作業工程の変更により、難度の低い作業(牛乳パック切り)では作業従事時間が増加した(図 4)が、難度の高い作業(シールはがし)では作業従事時間の増加が維持されなかった。また、指示書については対象者が使うことができなかったため、前の作業と次の作業の間の行動が連鎖しなかった。対象者 D は、作業を行なうことによって、作業時間の過ごし方が変化した(図 5)。対象者 E は、スケジュールボードの導入によって作業従事時間が増加し、不適応行動が軽減した(図 6)。また、対象者 5 名が揃う場面では、5 名が揃って作業をする様子が見られた(図 7)。

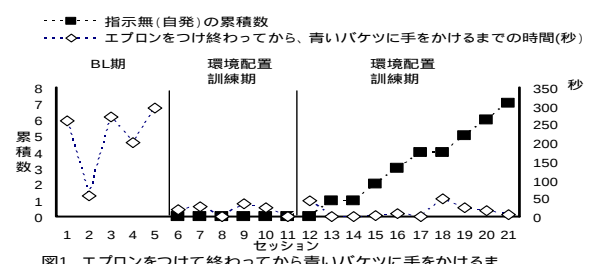


図1 エプロンをつけて終わってから青いバケツに手をかけるまでの時間の推移と自発率(1機会1セッション)

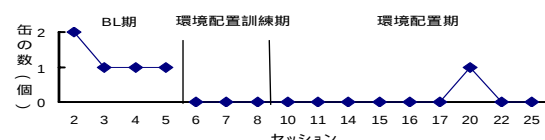


図2-1 缶をより分ける(缶を投げる、戻す数)

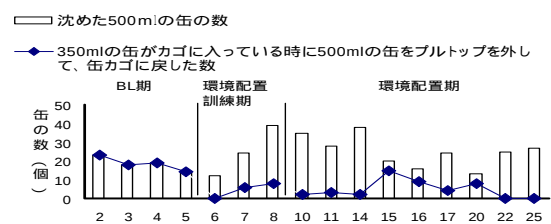


図2-2 缶をより分ける(沈めた500mlの缶の数とプルトップを外してカゴに戻した500mlの缶の数)

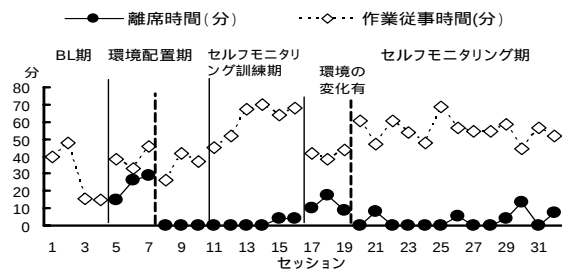


図3 缶潰しの離席時間と作業従事時間の推移

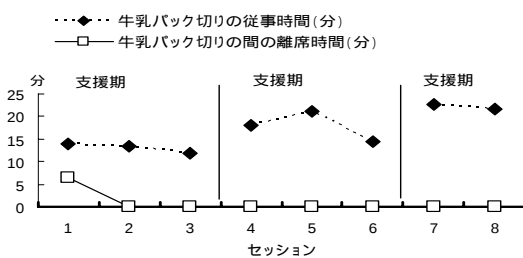


図4 牛乳パックの従事時間と離席時間の推移

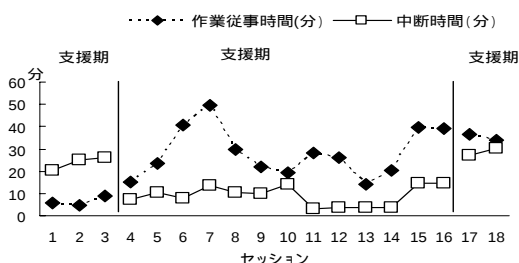


図5 作業従事時間と中断時間

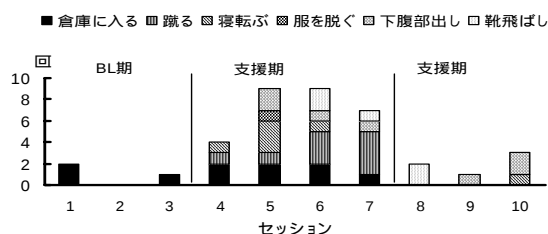


図6 不適応行動の内容と回数の変化

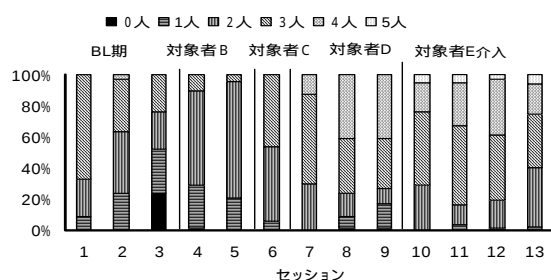


図7 作業をしていた人数の移り変わり

3) 事後評価

研究全般、個々の対象者の支援計画、指導、成果について、概ね肯定的な回答を得た。

・考察

本研究では、作業従事に困難を示す場面を O'Neill et al. (1997) の枠組みを参考に情報の収

集、整理を行なうことによって、先行条件からは刺激制御を実施可能にする条件が導き出され、先行条件と指導の方略からセルフモニタリングを実施可能にする条件が導き出された。

刺激制御とセルフモニタリングを併用した支援を行なった結果、難度の低い作業の時に次の行動の手がかりとなる物を対象者自身が使うことによって、作業従事時間と作業量の増加、不適応行動の軽減に効果があることが示された。また、セルフコントロール技法が職員の人員不足の問題を解決する効果があることも示された。

本研究の事例を概観した結果、重度知的障害者に対して実施可能なセルフコントロール技法適用に必要な以下の4つの条件が見出された。それは、

援助を得られるような職員の配置、作業の開始と終了を分かりやすくすること、動線を単純にすること、次の行動の手がかりとなる物を対象者自身が使えるようにすることであった。さらに、職員側の配慮として、複数の利用者の援助を可能にする職員の配置と職員の役割の2条件が見出された。と職員側の配慮(人的環境の調整)、

と(物理的環境の調整)は刺激制御を適用する際の工夫と配慮点である。また、はセルフモニタリングを適用する際の工夫と配慮点である。

以上のことから、重度知的障害者にも工夫と配慮によってセルフコントロール技法が適用でき、この工夫と配慮は機能的アセスメントから得ることができると示唆された。

文献

Albin, R. W., Lucyshyn, J. M., Horner, R. H., & Flannery,

K. B. (1996) Contextual fit for behavioral support plans : A model for "Goodness of fit".

千田茂(1990) 精神遅滞者の作業遂行に与える自己監視と自己強化の効果. 上越教育大学修士論文.

O' Neill , R. E., Horner, R. H., Albin, R. W., Sprague, J.

R., Storey, K., & Newton, J. S. (1997) *Functional assessment and program development for problem*

behavior: A practical handbook. Pacific Grove, CA:

Brooks/Cole.